

博士論文（要約）

アルド・ロッシおよびテンデンツァ運動における建築理論と表象の研究

片桐 悠自

本論文は、建築家アルド・ロッシ(Aldo Rossi, 1931-1997)を軸として、彼の主導したテンデンツァ運動の建築理論と表象の関係を研究するものである。

アルド・ロッシは1990年にプリツカー賞を受賞し、建築家・建築理論家・画家として活動した。また、ロッシが主導した建築運動「テンデンツァ」はイタリアだけでなく、国際的な建築理論の潮流に大きな影響を与えた。例えば、ティチーノ派といったスイスの現代建築家、五月革命後のフランスの建築教育制度改革、ピーター・アイゼンマンの建築都市研究所(IAUS)が挙げられる。特に、ヘルツォーク&ド・ムーロンは、ロッシがチューリッヒ工科大学で教鞭をとっていた時期の教え子であり、彼からの理論的・教育的影響を度々強調している。

テンデンツァ運動についての既往研究の傾向は未だ過渡期的段階にあるが、主に4つに分けられる。1つ目は、イデオロギーとの関わりから『都市の建築』をはじめとする建築理論を考察しているものであり、Aureli(2008)、Roveri(2010)、Cohen(2015)などが挙げられる。2つ目は、社会的文脈から独立して、作品自体を分析するという傾向であり、Lobsinger(2002)、Peckham(2008)、Orfeo(2012)などが挙げられる。3つ目は、ロッシの技術・構法観の研究であり、Marandola and Costi(2008)、Poletti(2011)が挙げられる。4つ目は、ロッシのドローイングに関する研究であり、Ratcliff(1993)、Koo, Kim and Sul(2002)、田中(2007)、Suatoni (2015)などが挙げられる。

本研究の目的は、「建築の生命」をモチーフとして、アルド・ロッシのドローイング・言説・建築を軸に、テンデンツァ運動における建築理論と表象の関係を解明することである。既往研究に対する本研究の位置づけとして、実現した造形と設計理論の特質を論じ、運動のリーダーであったロッシを軸に、テンデンツァ運動における「テンデンツァ」の語に込められた造形理念を解き明かす。

研究手法は3つの手法からなり、ドローイングの分析、文献資料の分析、建築の作品の現地観察に基づく分析となっている。1つ目のドローイングの分析では、イメージを通して作動するテンデンツァ運動の表象理念を考察するため、アルド・ロッシのドローイングを通時的に分析する。2つ目の文献資料の分析では、テンデンツァ運動において基幹的な役割を果たした建築理論家の言説を通して、建築理論と設計理念を分析する。3つ目の建築の作品の現地観察に基づく分析では、筆者自身が1950-1980年代のテンデンツァ運動のメンバーと関連する建築家の実現した物件に赴き、観察・撮影した。

本論文は3部構成となっている。1部、2部、3部それぞれの主要な手法が、研究手法であるドローイングの分析、文献資料の分析、建築の作品の分析という対応している。これら3つの手法は分析のうちに互助的に用いられ、各部を有機的に結合している。

第1部は1章と補章からなる。ロッシのドローイングと建築作品の連関を通時的に分析し、建築理論と表象の関係を論じる。

第2部は、2章と3章からなる。建築理論と設計理念の連関から、類型概念とテンデンツァの語義を論じる。具体的にはロッシ、ジョルジョ・グラッシ(Giorgio Grassi,

1935-)、カルロ・アイモニーノ(Carlo Aymonino, 1926-2010)の3者の著作を中心としてテンデンツァの思想の有機的な連関を論じる。

第3部は、4章、5章、6章から構成される。アイモニーノとロッシの作品について、第1部で考察された建築理論の表象の関係、第2部で踏まえた建築理論の設計への展開を踏まえ、テンデンツァの建築理論の建築作品への展開を考察する。

第1部1章では、運動の主導者であるアルド・ロッシの1949年から1981年にかけてのドローイングを通時的に分析した。具体的には、1950年前後の大学時代のドローイングと、1970年以降のドローイングの2つの時期について分析した結果、〈科学〉と〈宗教〉という2つの表象理念の同時存在が示された。前者の表象理念は、工場や都市の低所得者住宅といったドローイング中の構成要素と結び付けられていた。また、後者の表象理念は、ミラノ工科大学を罷免された1971年以降、中心的な主題となり、「暗殺された建築」を描いたドローイング群、「聖人の手」を描いたドローイング群、《希望：科学小劇場のために》において、それぞれ、「死」、「降架」、「復活」というキリスト絵画のモチーフに対応していたことが明らかとなった。さらに、〈科学〉と〈宗教〉の2つのモチーフは、1981年に娘とともに描いたドローイング《ヴェラ浴場》で止揚された。そこでは、異なる子どもの絵の技法に、アカデミックな絵画技法とは異なるオルタナティブな可能性を見出していたことが明らかになった。

第1部補章では、ドローイングにおける〈宗教〉のモチーフと建築設計との連関を解明するため、ロッシの日本への関心を考察した。その結果、ロッシの神道や仏教に対する関心を通じて、「世界劇場」の設計思想の背後には、宗教のモチーフが複合されていたことが明らかになった。つまり、ロッシの建築における宗教のモチーフとは、一神教だけではなく、神道や仏教、禅の思想も複合させたものであったことが示された。さらに、その宗教的理念は「世界劇場」で現実の設計に展開されたことが明らかになった。

第1部では、ロッシのドローイングの通時的な分析から、テンデンツァの建築理論の背後に潜む表象理念を明らかにした。第1部の帰結として、ロッシはドローイングにおける生活形式の描写を通じて、類型概念を探求していたことが明らかになった。

第2部2章ではテンデンツァ運動の「類型」概念を論じ、その背後にある〈生命〉の理念を考察した。まず、グラッシの類型概念においては、過去の合理主義の建築の伝統と結び付けられ、配列構成の単純さが中核的な理念であったことを明らかにした。同時にグラッシの建築を考察し、配列構成の単純さの理念が実際の作品で適用されていたことを明らかにした。次に、ロッシは類型理念において、現実の生産技術が実現する造形を重視したことを明らかにした。ロッシの類型概念においては、それぞれの建築造形自体に内在する固有の在り方が「建築の自律性[autonomia dell'architettura]」で

あり、独自の〈建築の生命[la vita dell'architettura]〉とみなされた。さらにこうした〈生命〉の理念は「類推」概念として展開され、テンデンツァのメンバーに共有されていたことが示された。

第2部3章では、「テンデンツァ」の語義を軸に、メンバーの著述を追うことで、テンデンツァ運動の有した都市の理念と政治思想を詳らかにした。その結果、「tendenza」は建築家の内面的な様式への意志と結びついており、建築家の内面に基づいたリアリズムの側面があったことが示された。また、1973年のトリエンナーレにおける成立にあたって社会改革の理念が背景にあったことを確認し、ティチーノ派への理想的影響を読み取った。さらに、共産党主流派との対立から、テンデンツァにおけるオルタナティブな建築運動としての意志があったことを確認した。このオルタナティブへの意志の背景として、アイモニーノとロッシと共有した〈貧しさ〉への視座が明らかになった。

第2部ではテンデンツァの建築理論を、設計理念と建築造形を中心として考察し、「テンデンツァ」の語義を洗い直した。第2部の帰結として、テンデンツァ運動における〈生命〉の理念の共有が明らかになった。さらに「傾向[tendenza]」という言葉が一方的ではなく、オルタナティブとしての動的な変化を指すものであることが明らかになった。

第3部4章では、アイモニーノとロッシの両者が共有していた〈貧しさ〉の基底にある生産技術の理念を論じた。その結果、アイモニーノの「テンデンツァ」の理念において、〈生命〉のモチーフが包含されていることが明らかになった。また両者は建築設計において、生産技術の理念を〈貧しい材料〉として取り上げたことが示され、材料としてのしっくいに着目していた。さらに、〈貧しい材料〉としてのしっくいの造形を考察し、ヘルツォーク&ド・ムーロンへの影響を考察した。さらに、同時代のアルテ・ポーヴェラとの造形的類似も示され、テンデンツァの技術観における〈貧しい建築〉への志向を示した。

第3部5章では〈貧しい建築〉の展開を明らかにするため、アイモニーノの15作品を論じた。1950-1960年代の作品には、アルヴァ・アアルトやルドヴィコ・クアローニ(Ludovico Quaroni, 1911-1987)の影響が見られ、建築に〈石〉を彷彿とさせる被覆材が用いられた。一方、「ガララテーゼの集合住宅」以降、独自の被覆材として色しっくいを使い始め、被覆材の変遷が示される。1970年代から三原色の使用が顕著になり、1980年代においても部分的に原色が使われていた。結果として、アイモニーノは被覆材を通時的に変化させたが、ほぼ一貫して色彩のコンポジションを重視し、被覆材と色彩を変遷させた。さらに、アイモニーノの被覆材はテンデンツァ運動やロッシの作品への影響が推察される。

第3部6章ではロッシの21作品について、しっくいを中心とした被覆材を論じた。特にアドルフ・ロースから受け継いだ材料の簡素さの理念は、しっくい仕上げとして現実作品に適用された。特にしっくいは都市に出される〈皮〉として捉えられ、1970

年代以降しつくと他の材料との複合に展開され、通時的な被覆材の変遷が確認された。また、「ジュッサーノ礼拝堂」では、被覆材によって、生と死の境界を造形に表現しようという試みが示された。

第3部では、第1部で考察された建築理論と表象の関係、第2部で踏まえた建築理論の設計への展開を踏まえ、テンデンツァ運動の理論の建築作品への展開として、ロッシとアイモニーノの作品におけるケーススタディを行った。第3部の帰結として、ロッシとアイモニーノは〈貧しさ〉を志向する上で材料に着目し、建築作品における被覆材を動的に変化させていったことが明らかになった。

結論として、「テンデンツァ[tendenza]」という言葉は、〈建築の生命[la vita dell'architettura]〉を中核的理念として有していたことが明らかとなった。ロッシ自身の「建築の生命[la vita dell'architettura]」ということばに表れているように、現実に実現した建築に〈生命[bios]〉を認めることであった。

言い換えるなら、〈生命〉とは、政治や社会に関わる複合的な建築の諸問題を引き受ける建築家が、建築自体に込める自律性[autonomia]であり、テンデンツァにとっての「自律性」は、〈建築の生命〉の意味を包含していた。その意味で、「テンデンツァ[tendenza]」とは、「生の流動[tendenza della vita]」と読み替えることができると考えられる。

こうした生命観の背景には、イタリア語の「自律性[autonomia]」という単語が「オートノミー」よりも「自治」というニュアンスが強く、テンデンツァ運動と同時期に発展を遂げた社会運動「アウトノミア運動」との理念的類似が示唆される。いうならば、〈建築の生命〉とは、人間の生命と同様、必ずしも一貫したものではない〈生命〉として捉えられていた。その意味で、英語圏で訳出された「オートノミー[autonomy]」—「自律性」という言葉を、対応するイタリア語の単語「アウトノミア[autonomia=自律性、自治]」という言葉の意味を踏まえて洗い直し、テンデンツァの生命の理念をグローバルな建築表象として位置づけることができると予測される。

今後の展望としては、ロッシ、アイモニーノ両者の師であるクアローニを起点として、ジュゼッペ・パガーノやジュゼッペ・テラーニ、アダルベルト・リベラといったグルッポ7の建築家との接続が予想される。

さらに、テンデンツァの生命観には、日本のメタボリズム運動との理念的共通点が見られる。ロッシは「東京計画1960」やメタボリズムの技術的決定論の側面を強く批判したが、そこには「生命」をマニフェストにした建築運動への撞着的感情とともに、不変の技術を前提とした計画に反抗していたと推察される。テンデンツァの建築の〈生命〉は、予期せぬ計画の変更や間違い、中断、時として未完成であるような建築を包摂し、建築家の手を離れた変更積極的に価値を見出していた。こうした理念は、榮久庵憲司、大高正人、大谷幸夫の計画とも類比させられると考えられる。